The University of Osaka Institutional Knowledge Archive

Title	Natural history of colorectal polyps and the effect of polypectomy on occurrence of subsequent cancer
Author(s)	村上, 良介
Citation	大阪大学, 1992, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/38437
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

氏　　　　名	村上良介（むらかみりょうすけ）
博士の専攻分野の名称	博　士　（医　学）
学位記番号	第　10365　号
学位授与年月日	平成4年7月6日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	Natural history of colorectal polyps and the effect of polypectomy on occurrence of subsequent cancer **（大腸ポリープの自然史と内視鏡的摘除の大腸がん発生抑制効果に関する臨床疫学的研究）**
論文審査委員	（主査） 教 授　多田羅浩三 （副査） 教 授　森　武貞　　教 授　森本　兼曩

論文内容の要旨

［目　的］

結腸・直腸（以下，大腸と総称する）のポリープは，大腸がんの少なくとも数倍から10数倍の頻度で発見される。これらのうち，一定度以上の大きさまたは異型度をもつ場合，腺腫内がんの診断またはポリープの治療のために，内視鏡下に摘除することが多い。一方，従来より経験的に，大腸腺腫は前がん病変として注目されている。しかし，腺腫の自然史は殆ど明らかにされていない。また腺腫を摘除することにより，大腸がんの発生が抑えられるか否かも，まだ確かめられていない。

申請者は，大腸がん検診に従事しているが，大腸がんのほかに多くの大腸ポリープを診断している。本疾病の自然史，および内視鏡的摘除術が大腸がんの発生に及ぼす影響を明らかにすることは，大腸がん対策の効率的な推進に対し特に重要であると考え，以下の研究を行った。

本研究の目的は，大腸ポリープ患者からの大腸がん発生のリスク，および内視鏡的ポリープ摘除による大腸がん発生の予防効果について，それぞれ定量的にその特徴を明らかにすることである。

このため，大腸内視鏡検査受検者について，地域がん登録資料との記録照合により，内視鏡検査受検後の大腸がん発生状況を調査した。

［方　法］

府立成人病センター病院外来部門で，1974－85年に大腸内視鏡検査を初めて受けた府下在住者うち，盲腸まで，または予め行った注腸検査で異常を疑った部位まで検査された者全員（2, 237名）を選び出した。これらの者のうちから，大腸がんまたは胃がんの既往例，および初回検査以後3か月以内にこれらのがんが診断された者を除いた。残りの者のうち，初回検査時に大腸粘膜に著変のなかった者（正常群）760名，および大腸ポリープと診断された者（ポリープ群）648名を対象とした。さらに後者について，初回検査時に内視鏡的ポリープ摘除術を受けた者136名と，観察期間中1度も摘除術を受けなかった者305名を，それぞれ摘除群，非摘除群とした。

上記4群の者を対象として，大阪府がん登録資料との記録照合により1987年末までフォローし，各群からの大腸が

ん罹患数（O）を把握した。一方，大阪府一般住民の性，年齢，年代別大腸がん罹患率を用い，各群の期待罹患数（E）を求め，O／E比の形で大腸がん罹患リスクを観察した。また対照として，胃がん罹患リスクを同様の方法で算出した。

［成　績］

1）摘除群，非摘除群の間で，ポリープの占拠部位，個数，長径および組織型の分布を比べた。その結果，占拠部位および個数の分布には有意差を認めなかった。しかし，摘除群は非摘除群に比べ，長径が有意に大きく，また腺腫の割合が有意に高かった。

2）平均観察期間は，正常群7.1年，ポリープ群6.0年，摘除群6.1年，非摘除群6.3年であった。

3）観察期間中の大腸がんの罹患数は，正常群2名，ポリープ群10名（摘除群1名，非摘除群8名）で，各群のO／E比は，1.0，5.1（$p<0.01$），2.3，8.0（$p<0.01$）であった。

4）ポリープ群から発生した大腸がん10例の臨床経過を観ると，全例が初回検査時の組織診で腺腫と診断されていた。また，9例がポリープと同一部位にがんを発生していた。

5）胃がんのO／E比は，正常群1.2，ポリープ群2.7，摘除群1.7，非摘除群3.2（$p<0.01$）となったが，各群間に有意差はなかった。

［総　括］

本研究により，大腸ポリープ保有者は，非保有者に比べ，その後の大腸がん罹患のリスクが大きいこと，また，内視鏡的ポリープ摘除によりそのリスクが軽減する傾向を有することが明らかになった。

なお，ポリープ患者から発生した10名の大腸がん症例について，病理所見の検討を行ったが，adenoma-carcinoma sequenceを支持する成績を得た。

本稿発表後，対象数を増やし（大阪大学微生物研究所および国立大阪病院の内視鏡検査受検者より追加した），観察期間を1988年末まで延長した。その結果，各群の大腸がんのO／E比は1.1，3.6（$p<0.01$），2.7（$p<0.01$），4.8（$p<0.01$）となり，本稿で報告した知見とほぼ同様の傾向を観察した。

論文審査の結果の要旨

本研究は，大腸ポリープ患者からの大腸がん発生のリスク，および内視鏡的ポリープ摘除による大腸がん発生の予防効果について，それぞれ定量的にその特徴を明らかにすることを目的として，大腸内視鏡検査受検者（大腸ポリープと診断された者648名，および大腸粘膜に著変なしと診断された者760名）を大阪府がん登録との照合により平均6.6年間追跡し，これらからの内視鏡検査受検後の大腸がん発生状況を調査した。

その結果，大腸ポリープ保有者は，非保有者に比べ大腸がん罹患のリスクが大きいこと，また，内視鏡的ポリープ摘除によりそのリスクが減少する傾向を有することが明らかになった。なお，追跡調査の結果大腸ポリープ患者から発生したことが判明した10名の大腸がん症例について，病理所見の検討を行ったが，adenoma-carcinoma sequenceを支持する成績を得た。

近年本邦においては，大腸がんは罹患率，死亡率ともに急増しており，大腸がん対策は公衆衛生上の緊急課題となっている。このため，老人保健事業の1つとして，大腸がん検診が広く実施されることとなった。上記の成果は，特に大腸がん検診を効率的に推進するうえで重要な知見であり，本研究は学位に値すると考えられる。